

在から、*C. barbinervis* は $x=8$ の10倍体であり、*C. acuminata* と *C. alnifolia* とは $x=8$ の4倍体であるとみなされる。*C. barbinervis* における種分化の停滞は、このような核形態学的特質と関係があると思われる。

□西澤一俊・千原光雄(編)：藻類研究法 754 pp. 1979. 共立出版. ¥12,000. この書は編集者を含めて29名の若者によって執筆されたものである。内容は序論—藻類研究の歴史的背景と将来の展望、次いで本論として藻類の分離と培養、藻類の形態と細胞の観察法、藻類生理生態研究法、藻類の生化学的研究法の4章から成り、付録として藻類の分類、分類表、種の同定の参考書、それに和名・学名・培地名・事項の別に詳細な索引がついている。

各章では基本的事項・操作の解説につづいて各論に入っているが、各論のところは扱われている実験例も多く、しかも一つ一つが詳細である。たとえば、藻類の分離と培養では、培養研究の基本的事項につづいて、アオサなど11種の大型藻と、ボルボックス他4種の微細藻の培養例が、そして藻類の形態と細胞の観察の項では、基本的な器具やその操作法、各論としては、原形質連絡系、鞭毛、細胞壁、核と染色体などの具体的な観察方法が述べられ、走査型電顕による観察にまで及んでいる。生理生態研究法でも現存量、光合成、呼吸などのいろいろの測定法の解説にとどめず、大型藻・微細藻の測定例が詳細に述べられている。また、環境要因の測定では、最近注目されている水質汚染と関連して、藻類を利用した水質評価の問題にもふれている。生化学的研究法では光合成色素、酵素、同化物質、細胞壁構成物質、二次代謝物質のそれぞれについて、多くの例を挙げて抽出・検定・同定を述べ、藻類を対象にしたものとしては新しい分野である植物ホルモン、抗菌性物質、受精物質と性ホルモンにまで及んでいる。

従来、研究法、実験法と銘打った書物は数多く出ているが、対象を大型藻を含む藻類にしばって、これほどまでに関連分野を網羅し、しかも多くの具体例を挙げて、その実験法、研究法を述べたものは、これが最初であろう。しかも、著者がそれぞれの分野で現在活潑に研究活動をしている人達であるだけに、単なる研究法解説ではなくて、著者達が工夫をしながら研究を進め、体得された‘こつ’が極めて合理的な形で述べられている。入門を志す人には勿論、専門家にとっても誠に有益であり、編者の意図された“藻類研究法の手引になるような基本書”として、常時利用される書であろう。さらに、この書の大きな特色は、分野・事項ごとに目的、意義と問題点などの1章を設け、それぞれの実験・研究の目的や、その結果が藻類学研究の中で、どの様に位置し、どの様な意味をもつか、一つ一つ明快に述べられている点である。いうまでもなく、実験・研究はデーターを出すこと自体が目的ではなく、そのデーターの解析、意義づけが目的であるが、そうした点にまで及んでいることは、本書の価値をさらに高めるものであろう。

(山岸高旺)